失われゆく延喜式内社を求めて【番外篇】 青年版国民栄誉賞〝人間力大賞〟受賞者 オキタリュウイチ

阿波忌部氏直系 三木信夫氏に聞く 知られざる践祚大嘗祭の秘儀 〝麁服神事〟とは何か〈後篇〉

天皇即位の儀式である大嘗祭（践祚大嘗祭）。その内容は極秘であり、一般には公にされることなくその伝統が引き継がれてきました。その大嘗祭のなかでも特に重要とされる秘儀が「麁服神事」であり、その神事は中臣氏（後の藤原氏）とともに権勢を有していた忌部氏の中でも阿波忌部のみが携わることができる極秘のものでした。大嘗祭における秘儀とは何か、そこで用いられる麁服とは、そして阿波忌部とはどんな氏族なのか。前回に引き続き、古来より大嘗祭「麁服神事」を執り行ってきた阿波忌部の末裔である三木信夫氏より、その重要性について伺います。

国指定重要文化財である三木家（徳島県美馬市木屋平）応接間にて。鎌倉時代より三木家第２８代当主（鎌倉まで９５代）、三木信夫さんとオキタリュウイチ。豊富な資料とともに、これまで語られることのなかった秘話をお話いただく。座敷の奥には、代々三木家の主人しか入ることを許されない「テングノマ」という部屋があり、古より三木家に伝わる“御神体”が祀られているという。

〝祭祀の神〟の系譜に連なる

オキタ／古代日本で祭祀を司った阿波忌部氏の直系であり、その伝統を現代に継承する唯一の人である三木さんに、大嘗祭および麁服の真実について前回に引き続きお話をお聞きしたいと考えています。大嘗祭で、麻を用いた「麁服」が別格の存在であった事は前回お伺いしました。

古来より、麻を栽培している地域は日本各地にありますが、〝大嘗祭で用いる麁服は、阿波の地で阿波忌部によって栽培された麻を用いたものでなくてはならない〟と聞いています。それは何故なのでしょうか。まずはその点についてお話いただけますか。

三木／なぜ阿波で栽培された麻のみを用いるのかについてですが、『古語拾遺』にも記載されていますように、古代阿波が麻の栽培の風土に適した土地として直系の忌部氏により開拓され、直系の忌部氏が大嘗祭のときには祭祠官の一人として御殿人となり、麁服を調進する役目を持っていたと思われます。

そしてもう一つ重要な事があります。それは日本という国の成り立ちに深く関わっています。全国の延喜式内社をひととおり調べると、阿波で祀っている日本の成り立ちに欠かせないような神々でも、奈良をはじめ全国には祀られていないものも多いんです。『古事記』に記載されている重要な神々を祀る古社がこの地に非常に多いという事実は、決して見逃すことはできません。

オキタ／国家のルーツと深い縁のある地で麁服が織られ、調進されることに意味があったのですね。しかし現在、文献上の証拠がさまざま隠蔽され、その真実が見えにくくなっているように思います。一方で、なぜ麻を供納するのが〝中央忌部〟ではなく〝阿波忌部〟でなくてはならなかったのでしょうか。

三木／麁服を持って参内し、陛下が使用する大嘗宮の祭祀を執り行うところまでの始終に携わるのは、古代からずっと私たち阿波忌部のみ許されることでした。当時、忌部氏とともに宮中の祭祀を執り行っていた氏族として、中臣氏（後の藤原氏）が勢力を伸ばしていましたが、彼らはもちろんのこと、同じ忌部氏であっても中央忌部でさえタッチ出来ない、私たちの先祖だけが関与できる儀式だったのです。

阿波忌部氏のみが麁服を調進でき、祭祀の始終に関われるという事については、その氏族的なルーツが深く関わっているように思います。様々な古文献の情報から分かるのは、私たちの祖神「天太玉命」が祭祀の神で祭祀官であったことです。

オキタ／各忌部が祀る祖神（忌部五部神）のなかで、阿波忌部のルーツに当たる神は天日鷲命であるという説が現在主流ですが、一方で天太玉命であるという説もあります。その点についてどうお考えですか。

三木／実際、大嘗祭に麁服を調進することを考えると太玉の系統でなければ可能ではないであろうと考えられます。皇學館の教授とも一度その話をしたのですが、教授もそのように同意説明していました。阿波忌部がヤマト王朝の最初から関係しているということは即ち、太玉の一族として祭祀に関わっている可能性が高い。つまり、天太玉命の系譜が天日鷲命につながっているという事です。

オキタ／一般的には中央忌部を天太玉命の本流とし、そこから各地方に行ったとされますが。

三木／実際は、そうではなかったようです。千葉県房総半島の延喜式内社で一宮である安房神社のなかに系図がありまして、非常に密に阿波との婚姻関係を結んでいることが分かります。天日鷲命の孫である由布津主命のもとに天太玉命の孫である天富命の娘の飯長姫命が嫁いでいる記録が残されている。そのように阿波忌部の祖神とされる天日鷲命と天太玉命の一族とは最初から一体化していたわけです。

天太玉命は神話でも祭祀の神様として瓊瓊杵命とともに高天原から降りてきます。その子孫が6世紀半ばに職掌から忌部という姓を王から授与されている。私自身、房総半島や栃木、島根の各地の伝承地を歩いてみましたが、そこに住んでいる神社の総代さんなどの多くが〝阿波から来た〟と胸を張っていました。忌部伝承のある全国各地では、ほとんど天日鷲命ばかりの伝承でした。

オキタ／阿波の場合、延喜式内社として、忌部神社、天日鷲命の長子の大麻比古を祀る社、天日鷲命の孫の宇志比古を祀る延喜式内社が見られますね。孫の宇志比古が、まずはお祖父さんの忌部神社を建てて、続いてお父さんの大麻比古神社を建てたのでしょうか。天太玉命をルーツに考えたとしても、各地の伝承や所在地、そこに暮らす人々の話と何ら矛盾しないように思います。

断絶の時代を超えて伝わる阿波忌部の秘儀

オキタ／阿波忌部氏が麁服を作れなかった時期もあったと聞いていますが。

三木／長い歴史のなかで、何度か危うい場面がありました。大きく分類すると、南北朝動乱からですが、皇室も応仁の乱からの戦火によって大嘗祭自体が途絶えた時期。そしてもう一つは、江戸時代徳島藩により忌部神社が隠蔽された時期が挙げられます。

オキタ／過去の文献を調べると、１０３代後土御門天皇を最後に応仁の乱が始まりますね。戦乱の世という非常事態が永く続き、１１３代東山天皇すなわち徳川の時代まで２２７年の間、大嘗祭自体が行えなかったとあります。その期間は当然ながら、麁服の供納も行われ

三木信夫（みき・のぶお）
昭和 11（1936）年、徳島県美馬市、阿波忌部氏直系の三木家に生まれる。関西学院大学法学部卒業。現在、「NPO 法人全国重文民家の集い」代表幹事。国重要文化財、三木家住宅の管理者。三木家は阿波忌部（いんべ）氏直系としての忌部氏であって、上古以来、歴代の践祚大嘗祭に、御殿人（みあらかんど）として「麁服（あらたえ）」を調進して朝廷と深いつながりを持っていた。麁服調進は、南北朝動乱に至り、以降中断していたが、復活して大正・昭和の大嘗祭にその任を果している。平成２年の大嘗祭は、旧木屋平村・山川町の大勢の方々の物心両面での支援と協力により「麁服」調進の任を果した。

オキタリュウイチ　クリエイティブディレクター
昭和 51（1976）年、徳島県生まれ。早稲田大学中退。行動経済学に基づく経済心理学を独自の手法でマーケティングに応用し、数々の事業再生に従事。京都の老舗米屋をネットで 17 億の売上にするなど、驚異的な成果を生み出す。同時に社会活動家として、自殺者撲滅や障害者の起業支援を日本財団と共催するなど、社会的課題の解決にも取り組む。

ていなかったのですね。

三木／実は、大嘗祭復活の徳川の時代以降になっても、阿波忌部が麁服の制作に携われない時期が続いたのです。東山天皇の頃、いちど大嘗祭が復活し、次の中御門天皇は中断、115代桜町天皇の御代に常典として復活しますが、徳島藩より〝忌部神社所在不明〟との報告で、忌部氏も絶えたであろうと皇室が判断し、神祇官主導で麁服用として麻織物を調製していたためです。

皇室の神祇官の祭祀官が阿波忌部の代わりに、麁服を代行して製作し「忌部所作代」（＝忌部氏の代行）と必ず表示して使用していたのです。阿波忌部が麁服製作にも祭祀にも実質的に関われない時期は、南北朝の光明天皇（光明院）の時代から大正天皇による麁服神事復活まで、557年間ものあいだ続きました。

オキタ／阿波忌部が活動できない時期が、それほど長い期間続いていたという事実には本当に驚きます。『古語拾遺』にあるように祭祀を次々に中臣氏に奪われていく経緯がありましたが、以後もまた違う問題で麁服を作れなくなってしまったのですね。

ところで、大嘗祭復活後は、阿波忌部に代わって神祇官が麁服の神事を行っていたということでしょうか。

三木／神事も引き続き行っていました。当時の桜町天皇以下、京都所司代、京都御所の公家たちが応援してくれ、幕府に陳情し、八代将軍吉宗の認可のもと、細々と小さいながら大嘗祭を行うことが出来たのです。ただし、大名には一切関与させないという事でしたが。そのような公には知られる事のない大嘗祭が、明治時代まで続くことになりました。

オキタ／私感ではありますが、麁服の神事が行われていなかった期間は武家ばかりが目立ち、天皇の影が薄いように感じます。やはり大嘗祭における麁服が天皇の霊的権威にも深く関わっているのではないかと。その後、ふたたび大正時代に復活したようですが、それはなぜ実現したのでしょうか。

三木／大正時代になって、祖父三木宗治郎や当時の斉藤善春忌部神社宮司らが中心となって麁服再興の陳情等があらためて本家である阿波忌部で作らなければという議論になったようです。当時、それまで所在地が不明となっていた忌部神社の本宮を主張する複数の神社が争っていましたので、国は争いごとを解決するために新たに別の場所に忌部神社を作ることになったのです。現在の徳島市眉山の中腹、二軒屋町勢見山にある忌部神社がそれです。

大正以降ふたたび阿波忌部氏の直系である三木家が麁服を調進するようになったのです。三木家には、1260年の亀山天皇から後伏見・花園・後醍醐・光厳（院）・光明（院）各天皇の大嘗祭を行うための官宣旨（＝麁服を作製して進上するようにという天皇の命令書の内容）と太政官符（＝麁服の受取に勅使を派遣する内容）の写し等があります。

真実の神話と修繕された神話

オキタ／幾度も断絶の危機にさらされながらも保持され、近代になり関係者の尽力によって復活した阿波忌部の伝統と麁服作り。神話時代から続く正統性がいまでも守られ続けていることは感慨深いことです。しかし、文献上の証拠がさまざま隠蔽され、そのような事実が見えにくくなっていますね。日本のルーツに阿波が深く関わっている事実は当時の政権にとって都合が悪かったのでしょうか。神話や史実が何らかの意図により、作為的に修繕されていったのではないかと感じてしまいます。

三木／例えば、『古事記』の〝国づくり〟と『日本書紀』の〝国づくり〟でも全く異なりますね。『古事記』の場合は伊予之二名島（四国）が出来たと書かれますが、『日本書紀』では大和（本州）が出来たことになっている。神々の名前も違いますし、同じ名の神でもぜんぜん役割が違ったりね。『古語拾遺』も体制が固まっているなかで反対のことを書くわけにいかないので、整合性をとっているように思います。

オキタ／文献によってだいぶ記述が異なりますね。『古事記』は最古の文献とされますが、ときの権力者の意向でだいぶ修繕されている部分があるでしょうし、『日本書紀』も中臣氏の主導で編纂されたものですから、かなりバイアスがかかっているように思います。一方で、斎部広成が編纂した『古語拾遺』は中央忌部の手による書物ですから、そこから初めて見えてくる真実があるのではないかと推測します。

三木／『古語拾遺』の場合は、本来は天太玉命を中心として、地方の忌部系の神々を「率いて」とあり、地方の忌部系の神々をすべて配下に置いています。それに対して『日本書紀』は天太玉命と忌部系の神々を対等に書いています。

オキタ／イメージとしては、天太玉命が阿波の神々を取り仕切っていたということでしょうか。

三木／実際、祭祀関係は天太玉命系が統括していた。天孫降臨の神話には鏡と玉作りを行う神々が出てきますが、『古語拾遺』によると、本来は天太玉命が引き連れているんですよ。神祇官でも官職は慣例として、京師に在住する忌部氏が採用され中臣氏と常に上位の官位に就く仕組みになっていたようです。宮中祭祀は慣例で必ず中臣と忌部が仕切るかたちだった。

オキタ／天皇家とともに大嘗祭を司っていた忌部氏は、天皇が祖霊からの承認を得るための儀式をとり仕切っていた。一方の中臣氏は、即位の礼すなわち新たな天皇の登場を民衆に知らしめるのが役割だった。これはどう考えても忌部氏の方が格上の役職に就いているように思いますが、民衆から見ると中臣氏がすべてをプロデュースしているように見える。なぜならば大嘗祭は一般には隠された秘儀ですから、民衆は知る由もありません。そのような構図によって、徐々に中臣氏が民の信頼を勝ち得ていき、権力を拡大していったのではないか。あくまでも私見ですが、私はそのように捉えています。

三木／皇學館大学名誉教授で、神道学者としても著名な鎌田純一先生にもお聞きしたんですが、現在、宮中祭祀を執り行う場合、祭祀の詳細が判りずらくなってきたときに宮内庁の祭祀官が最も参考にしている古文献は『古語拾遺』であると聞いております。

オキタ／そうなんですか（！）それはすごく意義のあることですね。長い歴史のなかで、いくつもの権力闘争があり、あるときは情報が隠蔽され、バイアスがかかっていったと考えられますが、いまこの現代において、あらためて中立的な立場で情報を解釈しようという動きは素晴らしいと思います。

失われた阿波忌部の面影、未だ秘められたる真実

オキタ／祭祀を忌部、中臣と分けて行っていたとのことですが、その二者に違いはあったのでしょうか。

三木／祭政一致の古代においては、事あるごとに神を祭って神意をうかがう行事を行っていました。朝廷においてこの祭祀の支度をするのが忌部氏の役目であり、神と人との間を執り持って神の言葉を人に伝え、人の言葉を神に奏するのが中臣氏の役割であったのです。ただし忌部氏は祭祀官の役目だけでなく祝詞も奏していたようです。現在、神社本庁で採用されている大祓祝詞は、中臣祝詞とされていますが忌部祝詞もありました。しかし、現在伝えられているのは中臣祝詞のみであり、忌部祝詞の実体はいまとなっては詳細が分かりません。

オキタ／祝詞のルーツについてはさまざまな方々が研究されていますが、忌部祝詞が実は中臣祝詞のルーツだったという説をよく目にします。それが本当だったとするとすごい事です。今はわからなくなってしまっています

新緑に映える三木家外観。三木山（標高 552m）の頂上近くに建つ江戸時代初期の建築物であり、徳島県内における最古の民家である。

室内の欄間は、不思議な宝玉と麻のカタチに象られている。

【注釈】

◉麁服（あらたえ）

“麁服”（阿良多倍）とは、「向こう側が透けて見える目の粗い大麻の布という意味」。阿波忌部直系氏人が御殿人（みあらかんど）として践祚大嘗祭のときにのみ調進する大麻製の織物の反物ことを指す。天皇が即位するための祭祀具であり、それに神を宿らせ、祖霊と一体化するために使用するとされる。神の依代ともいえる。現在は徳島県美馬市木屋平の三木山でのみ麻を栽培・製作しており、平成の大嘗祭の際にもこの地から調進された。

三木家の庭園にて。在りし日の思い出を伺う。信夫さんが幼少期に木登りしたという大樹は、いまもなお健在である。建物や山々の風情は数十年経っても変わらない。

【注釈】

◉忌部氏（いんべし）

大和時代から奈良時代（４世紀～８世紀）にかけて神事などに従事した氏族的職業集団。玉など祭具の製造・神殿宮殿造営に関わってきた氏族とされる。中臣氏（後の藤原氏）と勢力を争ったが、古墳時代の終わりと共に勢力が衰え、没落した。中臣氏が「政」を担当したのに対して、忌部氏が「祭」を担当していたとも言われ、中国型中央集権精度が強くなるにつれ「祭（＝祭祀）」の影響力が低下して没落したとも言われる。

※三木信夫氏、オキタリュウイチ氏、美内すずえ氏を招いた講演会が12月16日神田神社で開かれます。詳細は74ページをご覧下さい。

が、現代的に考えると、元々は忌部氏に著作権があったと言えるかもしれませんね。

三木／忌部祝詞は『古語拾遺』の後ろにも記載されていたようなんですが、その部分だけが現在は消失しているんです。忌部祝詞と中臣祝詞、その二つがどのように異なっていたのか、現在ではわからなくなってしまいました。

オキタ／祝詞のルーツにあたる原型が失われ、その派生のみになってしまった、と考えると、真実の歴史をつないでいくという事が如何に大切なのかを深く考えさせられます。もうひとつ、失われてしまっている重要な情報として、戦乱の世で所在が不明になってしまった忌部大神宮が果たして何処にあたるのか、いまとなっては分からないままですね。論社はいくつか挙がっていますが。その件もまた、しばらくは歴史におけるミステリーのままでしょうか。

三木／実は、三木家の古文書 1332年「忌部の契約状」の中に2月23日・9月23日の年2回山崎の市を定める旨から、忌部神社の本貫地は忌部郷のあった現在の吉野川市山川町山崎と確定しております。

オキタ／本当ですか？ それはすごく重要な記述ですね。

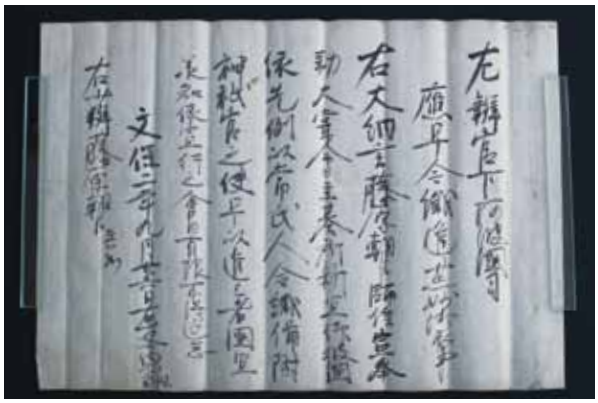
三木／今後もさまざまな側面から、明らかになっていく事もあろうかと思います。

オキタ／すでに失われてしまった情報はふたたび取り戻すことができない。しかし、いま残されているものは次の時代に残していくことが可能です。『古語拾遺』をあらためて紐解くこと、大嘗祭の意義を可能なかぎり伝えていくことなどは私たちがいま取り組める、せめてもの活動だと思います。

この度は、貴重なお話ありがとうございました。幾度も歴史的な危機に直面しながらも受け継がれてきた麁服の伝統。その価値を現在の時代に伝えていくためには、秘められてた真実の一部を徐々に解き明かしていく必要があると思います。今回のお話はそのための重要な第一歩になったように思います。

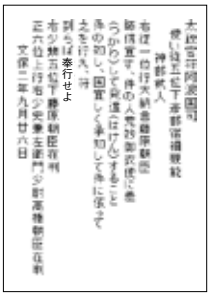
（インタビューより編集構成　石黒壯明）

「後醍醐天皇大嘗會　太政官符案」文保二年九月二十六日
後醍醐天皇の大嘗会に関するもの。勅使麁服御衣使が神部２人をつれて阿波国に下向する旨を太政官から阿波国司に申し下した（官符）公式の命令書の写し。歴史的に貴重な文献だが、不思議なことに重要文化財には登録されていない。



「後醍醐天皇大嘗會　官宣旨案」文保二年九月二十六日

「後醍醐天皇大嘗會　官宣旨案」



「後醍醐天皇大嘗會　太政官符案」

三木家に併設された資料館には、麁服製作に使用した機具や一連の資料が展示されている。

内閣府からの「従五位」の叙勲。

大正四年、大正天皇の即位に際して使用した麁服の一部。山崎の旧忌部神社跡地に織殿が建造され、信夫さんの祖父である三木宗治郎氏が指名された。